



セミョーノフスカヤ通りとアレウツカヤ通りの角に立つ日本人女性、1920年。

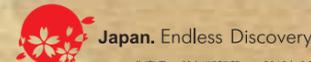
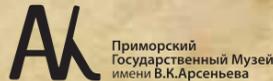
在ウラジオストク日本国総領事館
ロシア国立沿海地方アルセーニエフ記念総合博物館

編集：
藤本和貴夫
モルグーンZ.F.
山本多恵
ソコロフV.N.
モスクヴィーチナS.P.
長谷川朋範、山崎善隆、プストヴォイト A.V.
協力：日本・ウラジオストク協会

デザイナー：
バタショーフA.L.

写真提供：
ロシア国立沿海地方アルセーニエフ記念総合博物館、モルグーンZ.F.、ブヤコフA.M.
ボグダーノヴァN.A.、ソコロフV.N. 他

内容について、お気づきの点がありましたらウラジオストク日本国総領事館（jpcov1@vl.mofa.go.jp）へお知らせ願います。



非売品 禁無断転載 2018年3月



11

ウラジオストク鉄道駅

ニジニポルトヴァヤ通り2番(地図C6)

現在の建物は1912年2月5日に竣工した。最初の建物は1891年、ニコライ皇太子(後のニコライ2世)がその起工に立ち会い、1894年に完成した。建物は、ロシアの17世紀の建築様式で建てられた。ここはシベリア鉄道の起点で、モスクワにはその終点として同じような形のヤロスラブリ駅がある。ウラジオストクからモスクワまでの距離は9,288 kmである。1912年には敦賀—ウラジオストク航路が開かれ、ウラジオストクからシベリア鉄道でモスクワまで、そしてヨーロッパへとつながった。このようにして日本人にとって最短2週間で欧州まで行くことが可能となったのである。

現在は、シベリア急行鉄道「ロシア」号がウラジオストクからモスクワまでを6日間で結んでいる。



12

ニコライ皇太子凱旋門

ピョートル大帝通り2番(地図E4)

この凱旋門は1891年ニコライ皇太子(後のニコライ2世)が日本を回って、シベリア横断鉄道の起工式のためウラジオストクに巡洋艦「パーミヤチ・アゾフ」号で訪れた記念に建設された。凱旋門は1920年代の終わりにソビエト政権によって破壊されたが、2002年に実業家A.B.エルモラーエフの資金とイニシアチブにより元の姿に再建された。

13

旧東洋学院

(1899—1920)
プーシキンスカヤ通り10番(地図F3)

1896年着工、1899年竣工。ロシア極東・東シベリアで最初の高等教育機関である東洋学院の開校式は、1899年10月21日に盛大に挙行された。同学院では必修科目の中国語と英語のほか、日本語、朝鮮語、満州語、モンゴル語が教授された。ロシアにおける実践的日本研究の創始者であるスバルヴィンが1900年～1925年に同学院で(1920年からは東洋学院をベースに作られた国立極東大学で)教鞭をとった。日本人教師には前田清嗣(清次)、和露辞典で有名な松田衛らがいた。

現在この建物は、極東連邦大学(極東国立工科大学)となっている。



小西増太郎

(1861年～1939年)

小西増太郎は1861年生まれ。1881年神田ニコライ神学校でロシア語を学び始めた。1887年5月、26歳のときにロシアに渡り、1891年にキエフ神学校を卒業後、モスクワ大学に入学。指導教授の紹介でトルストイと知己になり、トルストイと「老子」をロシア語に共訳した。帰国後はトルストイの「クロイツェルソナタ」を尾崎紅葉と共訳している。1909年8月再度ロシアに渡り、トルストイと再会を果たした。

1916年小西はウラジオストクへ赴き、明治貿易の支店長に就任した(ナツィオナーリ・ホテル: 現フォークン通りに滞在)。小西は、1917年3月にウラジオストク商工会の副会長に選ばれ、1918年2月にはウラジオストクに設立された極東露日協会の日本側役員6名のうちの一人に選ばれている。会長は東洋学院のスバルヴィン教授であった。1918年3月17日、東洋学院で開かれた極東露日協会の総会には600名が参加した。そこではスバルヴィン教授と小西増太郎が基調報告を行った。小西は1936年に岩波書店から「トルストイを語る」(2010年新装版・万葉舎刊)を出版している。



14

二葉亭四迷

(1864年～1909年)
(地図E4)

日本近代小説の始まりを告げる「浮雲」を著した二葉亭四迷(本名: 長谷川辰之助)は、東京外国語学校(後の東京外国語大学)露語科で学び、ロシア文学に大きな影響を受けた。また、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ゴンチャロフ、ペリンスキー、ドブロリューボフ、ゴリキーなどの作品を翻訳した。

二葉亭は1902年5月1日、徳永商店主の招きでウラジオストクに3週間滞在した(セミョーノフスカヤ通り、地図B3)。この間に国際語であるエスペラントを学び、ロシアの知人たちを訪れ、経済や貿易に関する書類や統計を集め、有力なビジネスマンたちとの親交を深めた。また、劇場に行ったり、N. A. オストロフスキーや他の作家の作品を読む読書会を訪れて、チャーホフについて多く論じたりした。アイス研究者として有名なビウスツキとも友好を深めた。これら読書会などは、アムール地方研究協会(現:アルセーニエフ博物館国際展示センター。ピョートル大帝通り6番)で行なわれた。



15

女優松井須磨子が出演したプーシキン劇場

プーシキン通り27番(地図F3)

有名な演出家である島村抱月と芸術座で活躍していた松井須磨子(1886～1919年)は、1915年12月21日にウラジオストクを訪れ、在留邦人及びロシア人観衆を前にプーシキン劇場でロシアの劇団との合同公演を行った。この公演で松井須磨子は島村抱月の演出によるレフ・トルストイ「復活」の劇中歌として作詞作曲された「カチューシャの唄」を日本語で歌い、大好評を博した。松井須磨子の歌う「カチューシャの唄」は、当時日本で大流行し、レコード2万枚が売られたという。



16

作曲家・入野義朗の生家

クラスノズナメンヌイ横町5番(地図C3)

入野義朗は1921年11月13日にこの建物で生まれた。彼の父入野寅蔵は鈴木商店の支店長としてこの建物に住んでいた。寅蔵は1923年から浦塩日本居留民会会頭を務めていた。1927年に同商店が倒産したため、一家は福井県への帰国を余儀なくされた。1941年～1943年入野は東京大学経済学部で学び、同時に諸井三郎から作曲を学んだ。1946年若い作曲家のグループ「新声会」を創立。1949年からは東京銀行を辞めて東京音楽書院の音楽編集者を務めながら作曲活動に入った。1952年から桐朋学園で教鞭をとり、1960年～1970年には学園理事及び桐朋学園大学音楽学部教務部長を務めた。1957年に「20世紀音楽研究所」の創立者の一人となり、毎年行われる各種現代音楽祭の企画をする。1970年日本作曲家協議会委員長、73年日本現代音楽協会の委員長に就任。73年にはアジア作曲家連盟設立に参加。文部省審議官も委嘱されていた。1980年に逝去。ロシア正教会による葬儀が東京で行われた。



浦潮旧日本人街 散策マップ

～日本にゆかりのある
ウラジオストクの名所・旧跡巡り～



スウェーデン・ウラジオストクに遊覧する日本人女性(19世紀末)



1 旧日本総領事館
(1916年～1946年)
オケアンスキー大通り7番 (地図C4)

1876年、ウラジオストクに日本貿易事務館が開設された。キタイスカヤ通りとペキンスカヤ通りの角に建てられた木造の建築物で、建設を請け負ったのは、1868年に長崎からウラジオストクに来て、建築請負業やレンガの生産に携わった有田伊之助である。1907年、貿易事務館は日本領事館となり、1909年には総領事館に昇格した。

1914年に古い木造の建物はとり壊され、同年6月4日には、建築家三橋四郎の手により同じ場所に2階建て石造りのギリシア式の建物の建設が始まった。その間、総領事館はパービンツェフ商人の館（現在のアルセーニエフ博物館）に置かれた。新しい総領事館の建物は1916年に完成した。当時この建物の中央のひさしには、ギリシアの勝利の女神ニケが両端にグリフォンを従えて飾られていた。また正面玄関の両脇には一回り大きいグリフォンが置かれた。現在この建物は沿海地方の裁判所となっている。



総領事館の木造建物 1876～1914年

2 浦潮本願寺跡
(1914年～1937年)
アレウツカヤ通り57番 (地図 C1, C3)

1886年西本願寺はウラジオストクに初めての海外布教所を開いた。1894年に土地（セミョーノフスカヤ通り19番地）を商人のM・シェヴェリョフから10年の契約で借入れ、そこに自前の建物を建てた。同年、その建物の1室で小学校を開設した。1904年の日露戦争開戦によってほとんどすべての日本人がウラジオストクを去ったため、浦潮本願寺は活動を休止した。戦後、布教所はいろいろな所を転々とし、最終的には1914年にアレウツカヤ通りの韓人街との境に木造の建物を新築した。いずれはその近くに石造りの建物を建てる予定だったが、この計画は、ロシア革命、ロシア内戦及び外国軍の干渉によって実現しなかった。浦潮本願寺は1937年に閉鎖され、その場所には現在、黒くなった土台の石がいくつか残されているだけである。浦潮本願寺



は当時、故郷から遠く離れて生活する日本人にとり癒しの場であり、啓蒙と交流の場であった。初代の住職は多門速明（1886年～1902年）、その後ほぼ30年にわたって太田覚眠（1903年～1931年）が住職を務めた。最後の住職、戸泉賢龍の未亡人である戸泉米子は2009年4月28日に97歳で亡くなったが、彼女の尽力とウラジオストク市民、極東国立大学東洋学院、西本願寺、日本の「浦潮本願寺記念碑建立を支援する会」、スタニスラフ・デザインセンターなどの協力により2000年、寺院が建っていた場所に記念碑が建てられ、また2002年には桜が植樹された。その桜が初めて花をつけたのは、2007年のことであった。現在、この友好広場は戸泉米子の名前を冠している。



3 旧日本人小学校
(1913年～1931年)
フォンタンナヤ通り21番 (地図B3)

最初日本人学校は浦潮本願寺の1室で、1894年に開校された。1913年12月、フォンタンナヤ通り19番の借地に建てられた2階建ての建物を購入。教室5部屋、職員室、教師の宿舎5部屋、体育館があった。生徒数は1915年に165人、1921年に269人、1922年に256人であった。1931年に学校は閉鎖されたが、授業はスイフンスカヤ通り（現在のウボレーヴィチ通り）にあった日本総領事館所有の建物の一つで1937年に至るまで非公式に続けられた。



4 旧松田銀行部
(1907年～1919年)
オケアンスキー大通り24番 (地図C3)

松田銀行部は1907年の日露戦争後、長崎市の十八銀行の支店として開かれ、十八銀行の外国支店網に加わった。ルーブルから円への換金、満州産大豆の輸出で多大な利益を上げた。1916年松田銀行部は朝鮮銀行に段階的に吸収され、1919年には朝鮮銀行浦潮斯徳支店となった。現在この建物は電話通信会社となっている。

5 旧杉浦商店
(1890年～1908年)
フォーキン提督通り23番 (地図C4)

1880年、アメリカと商売をしていた横浜の貿易商会在がウラジオストクに支店を開設した。横浜の本社が倒産した時、同支店の社員だった杉浦久太は、有利な条件で支店の財産を相続した。このようにして誕生した店は杉浦商店と名づけられた。

杉浦商店は一等商店として、1891年にはヨハン・ランガリティエ&Co.、チューリン&Co.、ブルネル、クズネツォフ&Co.、リンドゴーリム、クンスト&アリベルスなどといったロシア、ドイツの大商店と肩を並べるまでになった。1897年からは、銀行業務や汽船会社の代理店として大家汽船の運航にも携わるようになり、1902年には、日本海上保険会社も所有した。1904年の日露戦争開始とともに、日本人はウラジオストクを去り、杉浦商店も閉鎖された。戦後再開したもの、もうかつての勢いはなかった。杉浦商店はまた、日本とウラジオストクを結ぶ大阪商船の代理店としても有名だったが、1908年に大きな負債を抱えて倒産した。



6 旧朝鮮銀行
(1918年～1930年)
オケアンスキー大通り9/11 (地図C4)

松田銀行部を段階的に吸収し1919年に名前を変えた朝鮮銀行浦潮斯徳支店は、1922年10月まで日本の浦潮派遣軍との間で積極的な業務を行った。日本軍がウラジオストクから撤退した後も、朝鮮銀行浦潮斯徳支店は、ダリトルグ（極東銀行及び極東貿易会社）との関係を維持した。1928年、日ソ漁業協定締結後、同支店は東京支店を通じて日本の漁業者によるオホーツク海での操業のために業務を行い、1930年には朝鮮銀行全体の10%の利益を生むまでになった。しかし、その年の暮れにソビエト政権が監査を行ったところ、密貿易及び違法為替操作への関与が発覚したとして閉鎖された。

7 旧妹尾商店、堀江商店、太田商店
アレウツカヤ通り39番 (地図C3)



堀江直造は22歳のとき（1892年）、日用雑貨果物輸出入業の西澤商店の社員としてウラジオストクに渡り、1899年に店の経営者となった。日露戦争後ウラジオストクへ戻り、青森からの果物の売買などに携わり、1909年の自由貿易港廃止の後は、缶詰や素麺工場を開いた。

日本軍のシベリア出兵の期間（1918年～1922年）日本軍に協力するために日本商人が作った軍事用達社の社長となった。また1919年にはセミョーノフ将軍とも商売をしたシベリア商事の社長にもなった。堀江氏は日本人社会の中での信用が高く、日本人会会頭など様々な要職に選ばれていたのである。



8 旧横浜正金銀行
(1918年～1924年)
スヴェトランスカヤ通り20番 (地図C4)

1917年、横浜正金銀行が満州で日本政府から与えられていた国庫金取扱業務は、朝鮮銀行に委譲された。1918年横浜正金銀行は、北満州からの農産物を大連経由ではなく東清鉄道とウスリー鉄道を使って輸出するために、ウラジオストクに支店を開設した。1922年～1924年、ウラジオストク経由の輸出は大連経由を大幅に上回った。しかし、日本軍の撤退（1922年）を受け、横浜正金銀行は1923年、輸出融資業務を停止する決定をした。1924年3月、ウラジオストク支店は閉鎖され、その業務はハルビン支店へ移管された。現在この建物は国立アルセーニエフ博物館となっている。



9 旧商船組
オケアンスキー大通り1番 (地図C5)

商船組は、1919年定期船の代表事務所として近藤繁司によって創立され、運送業務、海上輸送、倉庫業などに従事した。近藤は、埠頭、鉄道への引き込み線、一時保管用倉庫、社員寮・食堂付きの事務所を建てた。ソビエト政権の到来によって商業環境は一変し、商船組はソビエト連邦の中に存在する唯一の日本企業となったが、1937年4月に閉鎖された。近藤繁司は、ウラジオストクから居留民全員を引き揚げさせた功績で勲六等瑞宝章を授与されたことで知られる浦潮斯徳居留民団の初代会長、川辺虎の義理の息子に当たる。現在この建物は、商業銀行の支店となっている。

10 旧「浦潮日報」編集部
オケアンスキー大通り13番 (地図C3)

「浦潮日報」日本語版の第1号は1917年12月9日に発行された。編集者兼発行者は、東京外国語学校出身の和泉良之助であった。日本の有力企業家の資金と日本政府の資金援助により日刊として発行されていた。日本からやってきた多くの人々はロシア語を知らず、本邦の新聞は到着が遅く、1917年の2月革命後の状況、内戦と外国軍による干渉など激変する社会情勢に関する情報が必要とされていたのである。その後編集部は、キタイスカヤ通り11（「イズムルード」の向い、オケアンスキー大通りとセミョーノフスカヤ通りの角）に移転した。1920年4月11日からロシア語版の浦潮日報も週に2回発行されるようになったが、内容は日本語版とは異なっていた。浦潮日報は、普通サイズは1917年12月9日から1922年10月20日まで、その後まもなく再刊され、1931年まで4ページ立ての日刊として小さなサイズで発行されたことがわかっている。





与謝野晶子(1878年-1942年)記念碑
 オケアンスキー大通り39番
 1912年5月詩人と謝野晶子はウラジオストクを訪れた。彼女はシベリア鉄道でパリにいる夫の詩人と謝野敏幹に会いに行くために、敦賀から船でウラジオストクにやってきたのだ。1994年、与謝野晶子のウラジオストク訪問を記念して極東国立大学東洋学院の建物の前に記念碑が建てられた。そこには彼女が詠んだ「旅に立つ」が刻まれている。2007年12月にはウラジオストクで「与謝野晶子記念文学会」が創設された。



旧浦潮派遣軍司令部(1918年~1922年)
 アレウツカヤ通り44番
 最初この建物はホテルとして建てられた。1946年建築家リヤボフの指導の下日本人抑留者の手によって改修された。現在の建物はロシア連邦内務省沿海地方局となっている。



日本国総領事館員宿舎(1930年代)
 ウボレーヴィチヤ通り、15/2
 1930年代、この建物の中に日本国総領事館員宿舎が、日本人学校とウラジオ市民会と共に入居していた。



著名日本の作曲家ウラジミール・入野義典(1921.11.13-1980.6.23)がこの家で貿易会社「鈴木商店」ウラジオストク出張所長の家庭に生れた。入野義典 東京、日本2011年



2
 バヴレンコ横町
 ウトキンスカヤ通り



3
 ハローガヤ通り
 アレウツカヤ通り



4
 フォンタンナヤ通り
 ウボレーヴィチヤ通り



16
 ホテル
 イズムロード・プラサ
 セミョーフスカヤ通り



7
 モルドフツェヴァ通り
 オケアンスキー大通り



2
 フォーキン提督通り(旧ベキンスカヤ通り)
 百貨店



6
 スヴェトランスカヤ通り
 百貨店



5
 フォーキン提督通り(旧ベキンスカヤ通り)
 中央郵便局



1
 スヴェトランスカヤ通り
 革命戦士広場



14
 スヴェトラノフ大通り
 ラゾフ通り(旧ホルタフスカヤ通り)



15
 フセヴォド・シセルツェフ通り
 ブーシンスカヤ通り



13
 スヴェトランスカヤ通り
 ネヴェリスコイ広場



12
 コラベリナヤ・ナベリジナヤ通り
 スヴェトラノフ大通り



8
 ヴェルサイユ・ホテル
 アルセーニエフ博物館



9
 コラベリナヤ・ナベリジナヤ通り
 中央郵便局



石垣及びロンドン海岸通り(「オケアン」映画館前)
 1940年代後半から50年代初めにかけて日本人抑留者により建設された。現在はアムール湾が望める散策道としてウラジオストク市民に親しまれている。



オケアン映画館
 エクヴァトル・ホテル
 ナベリジナヤ通り



アジムト・ホテル
 インジエネールヌイ横町
 ナベリジナヤ通り



ヴェルサイユ・ホテル
 アルセーニエフ博物館
 トウルダヴォイ横町



11
 鉄道駅
 鉄道駅前広場

ロシアにおける柔道発祥の地
 カラベリナヤ海岸通り21番
 ウラジオストクは1914年にロシアで初めて柔道の普及が始まった場所である。ヨーロッパ人として4人目の有段者となったオシチェフコフ(1892年~1937年)の尽力により、1913年6月15日にこの建物で最初の柔道サークルが結成された。同サークルではロシア人と在留邦人が練習に励んだ。この地での最初の柔道国際大会は、1915年にオシチェフコフの弟子と在留邦人との間で、1917年に小樽の選手との間で開催された。柔道、フランス式及び英国式ボクシング、柔術、フリースタイルレスリング、銃剣戦、フェンシング、それにロシアの格闘技を統合した「サンボ」という新しい種目が生まれた。1937年10月2日、オシチェフコフはモスクワで日本のスパイ容疑で逮捕され、10月10日プティルスカヤ刑務所で獄死した。名誉回復されたのは1956年であった。

オシチェフコフによる国際柔道大会100周年を記念し、2016年9月に同地において記念碑が建立され、2017年9月にウラジオストク市内において安倍総理大臣及びフーチン大統領の出席のもと、「嘉納治五郎杯」国際柔道大会が開催された。

